

AALA ニュース 139 号 短信欄

1) サンパウロフォーラム

19 July 2023
teleSUR

サンパウロ・フォーラムが閉幕

Sao Paulo Forum Concludes in Brazil

<https://www.telesurenglish.net/news/Sao-Paulo-Forum-Concludes-in-Brazil-20230703-0009.html>



フォーラム会場で演説するルーラ

リード

6月29日、第26回サンパウロ・フォーラムは、他大陸の代表者が一堂に会し、それぞれの人民的・反帝国主義的闘争に関する経験を交換した。会議はキューバ、ニカラグア、ベネズエラに対するアメリカの封鎖を非難した。

本文

ラテンアメリカの統合と主権を主張する57の社会団体から270人の代表が集まり、サンパウロ・フォーラムが開幕した。

ニカラグアの国会議員ウィルフред・ナバロは、この地域における米国の強圧的措置に対する共同の抵抗が、フォーラムの主要議題の一つであると表明した。

彼は「主権国家に対するいかなる強制的な措置も、経済的な侵略も拒否されるべきだ」と述べ、キューバ、ニカラグア、ベネズエラの革命プロセスを阻害することを目的とした米国の経済封鎖に強く反対することを強調した。

メキシコの左派政権党である MORENA の代表、マルサ・ガルシアは言った。

「米国はラテンアメリカやカリブ海諸国からの移民を攻撃している。移民は移民先の国を豊かにするが、移民先の国は何の利益もあたえない」と述べた。

そして「私たちは、過激派グループの憎しみを煽る非人道的で人種差別的な法律の下で、暮らすことはできません」と付け加えた。

サンパウロ・フォーラムの第 26 回大会には、他大陸の代表も参加し、それぞれの民衆闘争や反帝国主義闘争に関する経験を交換した。

ザンビア社会党のフレッド・メンベ党首は語った。

「三大陸の精神は失われておらず、我々の闘いを団結させる必要性を示している。帝国主義者たちは、われわれの国々を分裂させ、ラテンアメリカとアフリカを対立させようとしている。なぜそんなことをするのか？ それは鉱物資源を奪い、人々を搾取しようと企むからです」と語った。



1990 年 7 月、第 1 回会議時のカストロの写真。左がルーラ（当時労働党書記長）
一人おいて左が奥さん *Marisa Leticia*

2) 鈴木頌「浅井基文“国際情勢と中国外交”を学ぶ」

[21 世紀の日本と国際社会 | 浅井基文の Web サイト](#)（6/17 2023）の記事を
要約紹介します。

1 . 中国外交の基本的性格

A) 歴史的国際的立ち位置

- * 強烈なナショナリズムに基づく国民国家(nation-state)の建設
- * 世界第 2 位の経済大国として、アメリカに対抗する国として、あるべき姿の模索

B) 外交主体の問題意識

国家建設主体としての問題意識とは異なる経過を取っている。

- * 善隣友好

平和共存 5 原則（領土保全、相互不干渉、相互不侵略、平等互惠、平和共存）に基づく国家関係

- * 大国(米ソ)との対抗
- 「三つの世界」論、反霸権闘争
- * 21世紀外交→習近平外交

2. 習近平外交の成立

- A) 模索期 12年12月総書記就任から14年11月まで
- * 戦略的に軍事を重視し、遅れていた軍事力を伸ばした
 - * 軍事優先路線は日米両国との軍事リスクを増大させた
- B) 中央外事工作会議(14年11月)
- 「中国の特色ある大国外交」路線を打ち出す。
- 「实事求是」「調査研究」の原点に立ち返り、実践を通じて外交戦略を形成。
- C) 中央外事工作会議(18年6月)
- 「中国の特色ある大国外交」路線の具体化：6つの長期的基本方針
- 歴史観と役割観を踏まえた情勢把握
 - 人類運命共同体構築を目標とする国際統治システム
 - 「一帯一路」建設の推進
 - 安定的な大国関係の推進
 - 周辺諸国との関係改善
 - 途上諸国との関係発展(その際途上国を「天然の同盟軍」と規定)

3. 「特色ある大国外交」の柱

以上の経過を踏まえ、現在展開されている「特色ある外交」を分野別に見ていく。

A) 中米関係

18年会議の6つの柱のうち第1の柱が激突する。すなわち

- * 「世界のグローバル化」を踏まえ(歴史観)
- * 「国際社会の多極的平和共存にふさわしい国際秩序」の実現を目指す(大局観)
- * 「一帯一路」建設を通じて大国としての役割を果たす(役割観)

これは米国に対する真っ向勝負である。

なおこの項で、浅井氏は

「台湾、南シナ海島嶼(西沙、南沙、東沙)が中国の領土であることは、本来、歴史的、法的に議論の余地はない」と断言しているが、これについては保留する。

B) 中ロ関係

* 両国は長期的基本方針のうち ~ を共有する。

* 現実的關係：社会主義圏の崩壊以来、積み上げてきた実績もある。米西側との非友好的ないし敵対的關係とは対照的に長大で安定しか領国国境が最大の戦略的資産となっている。

* 中露關係強化の最大の成果が「ドルの武器化」に対する「脱ドル化」の進展が挙げられる。

C) 周辺諸国

中国外交にとって、周辺諸国との關係は常に緊張を強いられる。それは欧州諸国の「ロシア嫌い」(Russophobia)のすさまじさに比肩する。

国際世論に圧倒的影響力を振るう西側メディアは反口反中に全精力を集中している。

D) 途上諸国

途上諸国との關係では、「一帯一路」に基づく經濟協力關係が確実に進展している。

途上諸国が重債務に陥っている問題を中国の責任とする米・西側諸国の主張は、事実反している。

中国が仲介したイランとサウジアラビアの外交關係回復は世界の政治地図を塗り替えつつある。

3) キューバに中国のスパイ基地が存在するというウソ

キューバ共和国外務大臣 ブルーノ・ロドリゲス・パリージャ談話

キューバに中国のスパイ基地が存在するという米國務長官の主張は虚偽である。

この問題に対するキューバの立場は明確であり、揺るぎないものである。

國務長官のこれらの発言は根拠に欠けている。

その目的は、キューバに対する經濟封鎖と、近年封鎖を強化している最大限の圧力手段を維持するための口実とすることである。その圧力手段は、国際的にも、また米国内でも、ますます拒絶されるものとなっている。また、一方的なテロ支援国家リストから、キューバを除外することも要求されている。

キューバは、米国にとっても、どの国にとっても脅威ではない。米国は、キューバ国民全体を日常的に脅し、罰する政策を追求している。米国は、われわれの地域に数十の軍事基地を押し付け、保有し、また、キューバ国民の意思に反して、グアンタナモ県に不法占拠している領土に軍事基地を維持している。

われわれは、米国がわが国に対する敵意の長い歴史の中で作り出してきた多くの他の事例と同様に、新たな情報操作に直面しているのである。

(キューバ共和国外務省) (新藤通弘訳)

4)「キューバは、グアンタナモ湾における米原子力潜水艦の停泊に抗議する」

キューバ共和国外務省声明

キューバ共和国外務省は、2023 年 7 月 5 日にグアンタナモ湾に米国の原子力潜水艦が入港

し、7 月 8 日まで同湾の米軍基地に停泊していたことを断固として抗議する。このことは、

その政治的あるいは戦略的目的は不明であるが、米国の一段と高まった挑発である。

周知のように、米軍は、キューバ国民の意思に反し、1898 年にスペインの植民地支配に対

するキューバ独立戦争への膨張主義的介入に続いて始まった、わが国への非合法的な軍事占

領の植民地的残滓として、121 年間、この 117 平方キロメートルの領土を基地として占領

してきた。

問題は、この基地は、長年にわたり、米国にとって戦略的にも軍事的にも重要性に欠ける

飛び地であるということである。その居座りは、キューバの主権を侵害しようという政治

的目的に応えるものでしかない。ここ数十年、その実質的な便宜は、さまざまな国の何十

人もの市民を拘束し、拷問し、系統的に人権を侵害するためのセンターとしての役割を果

たすことに限られている。

この時期に原子力潜水艦が停泊するということは、この世界の平和な地域に原子力潜水艦

が存在する実際の軍事的根拠は何か、その目標は何か、そして戦略的目的はどのようなもの

かという点を問題にせざるをえない。

ラテンアメリカ・カリブ海地域の 33 カ国は、2014 年 1 月にハバナで署

名された「ラテン

アメリカ・カリブ海平和地帯宣言」に署名していることを忘れてはならない。

また、ラテンアメリカ・カリブ海諸国民の主権と利益を脅かす存在として、米国がこの地

域に 70 以上の軍事基地を設置し、その基地の程度はさまざまであるが、その他の作戦上の

軍事的存在ももっていることを考慮することも重要である。ラテンアメリカ・カリブ海の

天然資源に対する米国の野心を保障するために軍事力を行使する意図を、米国の上級軍司

令官たちは最近、公の場で言及している。

キューバキューバ外務省は、キューバにおける米軍の駐留を抗議し、グアンタナモ島の不法占拠領土の返還を要求することを改めて表明するとともに、近隣のカリブ海地域における米軍の

原子力潜水艦の駐留と航行がもたらす危険について警告するものである。

ハバナ、2023 年 7 月 11 日

(キューバ共和国外務省)

(新藤通弘 仮訳)

5) 紹介 「安斎育郎のウクライナ戦争論」 文責 鈴木頌

上記のブックレットを手に入れた。

紹介 「安斎育郎のウクライナ戦争論」

発行日は2023年7月6日

自費出版で、A4 版 堂々の100ページ、字がみっちり詰まっていて、中身も超濃密だ。

まえがき

この資料を読むには、読者にある種の「覚悟」が求められます(笑)。

というのは、おそらくは読者の皆さんがこれまで接する機会がなかった情報や、「えっ、そんなこともあるのか？」といったびっくりするような記述に頻繁に出くわすに相違ないからです。

先日、ある平和団体から送られてきた「賛同」要請の文書には、「ウクライナを版図に組み入れるために、ウクライナの国家と民族・文化を地上から抹殺することを狙った『プーチンの戦争』。破壊、殺戮、拷問、凌辱、そして子どもたちの強制連行—このプーチンによる世紀の蛮行をいまこそ打ち砕こう！とあり、『ロシア侵略軍にたいして徹底抗戦を続けているウクライナの人々は、いま悪逆非道の侵略軍を東部および占領地から追い出す大攻勢に起ちあがっています。このウクライナの人々と連帯して、プーチンのロシアによるウクライナ侵略に反対する反戦の声を、日本の地からいっそう大きくあげましょう』と書かれていました。

正直、私はドン引きしました。

本当にこの戦争は「悪逆非道なプーチンの侵略戦争」なののでしょうか？

私はロシア暴員でもウクライナ嫌いでもありませんが、ソ連崩壊後にウクライナが辿った歴史を詳細に学び、この戦争が始まった後ウクライナや NATO 諸国で何が起きているかについて事実を直視すれば、直ちに、上に紹介したようなウクライナ戦争観に対する疑問が湧くに相違ありません。歴史と現実と誠実に向き合うこと—これこそが私たちに求められていることであり、とんでもない独善的思い込みに陥らないための必要最小限の態度です。

私は、ウクライナ戦争を誘発した原因は、「アメリカによるウクライナの NATO 加盟への勧誘」と、「親ネオナチ系ウクライナ政権によるロシア語話者への民族浄化的軍事弾圧」にあると確信しています。2008 年に NATO 首脳会議でプーチン大統領がウクライナの NATO 加盟を提案し、2009 年に発足したオバマ政権のもとでジョー・バイデン副大統領とヴィクトリア・ヌーランド国務次官補を中心にウクライナへの親米政権樹立を企て、2014年のユーロ・マイダン・クーデターによって親米傀儡のポロシェンコ政権をつくり、極右民族主義者集団(ネオナチ)を正規軍に編入して東部ドンバス地方のロシア語話者に民族浄化まがいの軍事弾圧を加えた結果起こった戦争だと、私は深く信じています。

アメリカは、ウクライナの NATO 加盟問題をテコにロシアを戦争に引きずり込んで疲弊させ、NATO 諸国を対口制裁に誘い込んで、ドイツをはじめとしてロシアの天然ガスなどのエネルギー資源に依存してきたヨーロッパ諸国の経済を混乱に陥れ、エネルギー資源の対口依存を対米依存に転換させてアメリカ人勝ち状態をつくる—これこそが、21 世紀型のアメリカの世界戦略の一環として、10 年以上にわたって周到に準備されたウクライナ戦争の実態であると思います。なぜそう確信するに至ったか、どうぞこの冊子をお読み頂きたいと思います。

なお、ロシアはこの事態を「ウクライナ戦争」とは呼んでおらず、「特別軍事作戦」と称していることは承知していますが、実態としては現在「ロシア対 NATO」の戦争に発展しており、本冊子では「ウクライナ戦争」という言葉を用います。

この冊子が皆さんのウクライナ戦争観形成に役立つことを期待します。

3

副刊。2023年3月11日、信楽町の五親王に隣る「十川尚雄はろくし」にて「信楽博物館」に「マ・ナガサキ・ビキニ・フクシマ伝言館」を設立。2023年3月11日より、館長を務める。
メール・アドレス: jsanzai@yahoo.co.jp

表紙を開くと裏表紙のところに「読者の皆さんへ」という挨拶があるが、これは省略して最初のページが「まえがき」となっている。そのままコピーして供覧する。

目次

ページ	
3	まえがき
4	目次
5	ウクライナ戦争とは何か？
5	1. はじめに
5	2. NATO の東方拡大
9	3. アメリカによるウクライナへの傀儡政権樹立の画策と親口派住民の動き
13	4. ポロシェンコ政権の成立とネオナチ(極右民族主義者)勢力も動員したロシア語話者への軍事弾圧の始まり
16	5. ポロシェンコ政権の対米傀儡ぶり
17	6. ミンスク合意
19	7. ゼレンスキー大統領登場
21	8. ウクライナで戦闘勃発
23	9. ウクライナ戦争を起こした原因
25	10. 和平への動きと破綻
29	11. フェイク・ニュースだらけの西欧のメディア報道
29	①マリウポリ小児科・産科病院爆撃事件
30	②マリウポリの劇場爆撃事件
31	③ブチャの大虐殺事件
37	④ロシア兵による少女レイプ事件
39	⑤クラマトルスク駅爆撃事件
41	⑥クレメンチュクのショッピング・センター砲撃事件
44	12. ゼレンスキー政権のもとでのウクライナ政治・社会の実態
44	①ゼレンスキー政権独裁化への道
46	②和平模索から戦場の勝利志向へ
47	③ウクライナ戦争の戦況
49	④ロシアにより東南部4州の編入
49	⑤ウクライナ語話者とロシア語話者の対立
51	⑥ゼレンスキー政権下で起きていること(薬物汚染/治安/ナチ化/徴兵)
56	13. ウクライナ戦争におけるいくつかの重要事件
56	①対口経済制裁
59	②ノルドストリーム爆破事件
63	③クリミア大橋爆破事件
66	④ポーランドへのミサイル着弾事件
69	⑤カホフカ・ダム決壊事件
75	⑥子ども連れ去り事件
80	14. 結局、この戦争は誰がどういう目的で起こした戦争なのか？
80	①「ロシアの戦争」ではなく、「アメリカの戦争」
81	②「侵略戦争」と「人道的介入」
82	③アメリカの戦略的な狙い
83	④ウクライナ・NATO 連合が勝ったらどうなるか？
84	15. インドや中国のスタンス
86	16. ウクライナ戦争への日本の対応の誤り
90	17. 和平への道
93	18. おわりに
94	この冊子の申し込み方法
95	〈エピソード〉あるウクライナ兵の告白

中身は私から見ても相当脂っこい。メディアがフェイクをだだ

漏れにするのに対抗するにはこのくらい必要なのだが、それで読者に嫌われては元も子もない。しかし、そういう「斟酌」とは安斎先生は全く無縁だ。どこまでも突き進む。それは目次にさっと目を通しただけでもわかる。

とくに 1 1 節のいくつかの項は、私の知らなかった情報もいくつも入っている。どうせネタにはならないと思って飛ばしたところだ。

最近のニュースを扱った 1 3 節も要所を掴んで説明されている。かつて安斎さんがインチキマジックを暴露したのと同じ手法で、ウクライナと NATO とアメリカのウソが徹底的に暴かれている。正義派の人の最も読みたくないページだろう。

この冊子の申し込み方法

この冊子を必要としている方は、名前、送り先住所・電話番号、冊数を書いて、次の方法でどうぞ。

メール: jsanzai@yahoo.co.jp

郵便: 〒611-0023 宇治市折居台4-1-84 安斎育郎

1冊 200円で、お支払いは下記のゆうちょ銀行をご利用頂くか、代金相当の切手でも結構です。

●ゆうちょ銀行から振り込む場合

【記号】14440 【番号】3883851 【口座名】アンザイクロウ

●銀行から振り込む場合

【店名】四四八(読み:ヨンヨンハチ) 【店番】448 【預金種目】普通預金

【口座番号】0388385 【口座名】アンザイクロウ

17節には和平への道が示されているが、基本を抑えた、しかも現実的な和平への道が求められていることは言うまでもないだろう。継続的な和平を実現する上で肝心なのは、米国の身勝手な理由による介入を起こさせない保証であるが、いまから具体的なプロトコールを描くことは難しい。

むしろ大事なのは、回り道になるかもしれないが、二度とこういう戦争を起こさせないような国際世論の形成ではないだろうか。

巻末ページのウクライナ兵の告白は実に衝撃的だ。読んでみてください。

最後にこのブックレットの奥付を載せるので、ぜひとも多くの方がお申し込みくださるようお願い申し上げます。

